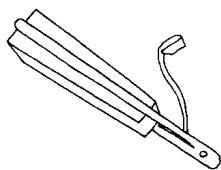


さざなみ軍記

井伏鱒二



さざなみ軍記



井伏鱒二

ほるぷ出版

市古貞次・小田切進・編 日本の文学 56

さざなみ軍記

著 者 井伏鱒二

責任編集 市古貞次（古典編）

小田切進（近代編）

発行日 昭和五十九年八月一日 初版第一刷発行

発行所 株式会社 ほるぷ出版

代表 中森詩人

東京都新宿区新宿二―十九―十三

電話（〇三）三五四―七〇三二（代）

総発売元 株式会社 ほるぷ

東京都新宿区新宿二―十九―十三

電話（〇三）三五六―六二二一（代）

製 作 東京連合印刷株式会社

印刷 図書印刷株式会社

目次

山椒魚

1

屋根の上のサワン

19

川

35

さざなみ軍記

121

注

井伏文学の出発点

沼田卓爾

349 333

挿絵四葉

御正伸

山
椒
魚

山椒魚^{さんしょうお}は悲しんだ。

彼は彼の棲家^{すみか}である岩屋から外に出てみようとしたのであるが、頭が出口につかえて外に出ることができなかつたのである。今は最早^{もはや}、彼にとっては永遠の棲家^{すみか}である岩屋は、出入口のところがそんなに狭かつた。そして、ほの暗かつた。強^しいて出て行こうとこゝろみると、彼の頭は出入口を塞^{ふさ}ぐコロップの栓^{せん}となるにすぎなくて、それはまる二年の間に彼の体^{からだ}が発育した証拠にこそはなつたが、彼を狼狽^{ろうばい}させ且^{かつ}つ悲しますには十分であつたのだ。

「何たる失策であることか！」

彼は岩屋のなかを許されるかぎり広く泳ぎまわってみようとした。人々は思
いぞ屈した場合、部屋のなかを屢々しばしばこんな具合ぐあいに歩きまわるものである。けれ
ど山椒魚の棲家は、泳ぎまわるべくあまりに広くなかった。彼は体からだを前後左右
に動かすことができたゞけである。その結果、岩屋の壁は水あかにまみれて滑なめら
かに感触されたので、彼は彼自身の背中や尻尾しつぽや腹に、ついに苔こけが生えてしま
ったと信じた。彼は深い嘆息をもらしたが、恰あたかも一つの決心がついたかのごと
く呟つぶやいた。

「いよいよ出られないというならば、俺おれにも相当な考えがあるんだ」
しかし彼に何一つとしてうまい考えがある道理はなかったのである。

岩屋の天井には、杉苔すぎごけと錢苔ぜにごけとが密生して、錢苔は緑色の鱗うろこでもって地所ちどころと
りこと（小児の遊戲の一種）の形式で繁殖し、杉苔は最も細く且かつ紅色べにいろの花柄かへいの尖せん

端に、可憐な花を咲かせた。可憐な花は可憐な実を結び、それは隠花植物の種子散布の法則通り、間もなく花粉を散らせはじめた。

山椒魚は、杉苔や銭苔を眺めることを好まなかった。寧ろそれ等を疎んじさえした。杉苔の花粉はしきりに岩屋のなかの水面に散ったので、彼は自分の住家の水が濁れてしまうと信じたからである。剩え岩や天井の窪みには、一群ずつの黴さえも生えた。黴は何と愚かな習性を持っていたことであろう。常に消えたり生えたりして、絶対に繁殖して行こうとする意志はないかのようであった。山椒魚は岩屋の出入口に顔をくっつけて、岩屋の外の光景を眺めることを好んだのである。ほの暗い場所から明るい場所をのぞき見することは、これは興味深いことではないか。そして小さな窓からのぞき見るほど、常に多くの物を見ることはできないのである。

谷川というものは、目茶々々な急流となって流れ去ったり、意外なところで

大きな淀みよどをつくっているものらしい。山椒魚は岩屋の出入口から、谷川の大きな淀みを眺めることができた。そこでは水底すいていに生えた一叢ひとむらの藻もが朗かな発音を遂げて、一本ずつの細い茎でもって水底から水面まで一直線に延びていた。そして水面に達すると突然その発音を中止して、水面から空中に藻の花をのぞかせているのである。多くの目高めだか達は、藻の茎の間を泳ぎぬけることを好んだらしく、彼等は茎の林のなかに群をつくって、互たがひに流れに押し流されまいと努力した。そして彼等の一群は右によろめいたり左によろめいたりして、彼等のうちの或あるる一ぴきが誤って左によろめくと、他の多くのものは他のものに後おくれまいとして一せいに左によろめいた。若もし或る一ぴきが藻の茎に邪魔されて右によろめかなければならなかったとすれば、他の多くの小魚こうおたち達はことごとく、こゝを先途せんとと右によろめいた。それ故ゆえ、彼等のうちの或る一ぴきだけが、他の多くの仲間から自由に遁走とんそうして行くことは甚だ困難であるらしかった。

山椒魚は、これ等の小魚達を眺めながら彼等を嘲笑してしまった。

「なんという不自由千万な奴等であろう！」

淀みの水面は絶えず緩慢な渦を描いていた。それは水面に散った一片の白い花卉によって証明できるのである。白い花卉は淀みの水面に広く円周を描きながら、その円周を次第に小さくして行った。そして速力をはやめた。最後に、極めて小さな円周を描いたが、その円周の中心点に於て、花卉自体は水のなかに消えてなくなった。

山椒魚は今にも目がくらみそうだと呟いた。

或る夜、一びきの小蝦が岩屋のなかへまぎれ込んだ。この小動物は今や産卵期のまいったぐなかにあるらしく、透明な腹部一ぱいに恰も雀の稗草の種子に似た卵を抱えて、岩壁にすがりついた。そうして細長いその終りを見届けること

ができないように消えている触手をふり動かしていたが、いかなる了見であるか彼は岩壁から跳びのき、二三回ほど巧みな宙返りをこゝろみて、今度は山椒魚の横っ腹にすがりついた。

山椒魚は小蝦がそこで何をしているのか、ふりむいて見てやりたい衝動を覚えたと、彼は我慢した。ほんの少しでも彼が体を動かせば、この小動物は驚いて逃げ去ってしまったであろう。

「だが、このみもちの虫けら同然のやつは、一たいこゝで何をしているのだろう？」

この一ぴきの蝦は山椒魚の横腹を岩石だと思い込んで、そこに卵を産みつけていたのに相違ない。さもないならば、何か一生懸命に物思いに耽っていたのである。山椒魚は得意げに言った。

「くったくしたり物思いに耽ったりするやつは莫迦だよ」

彼はどうしても岩屋の外に出なくてはならないと決心した。いつまでも考え込んでゐるほど愚かなことはないではないか。今は冗談ごとの場合ではないのである。

彼は全身の力を込めて岩屋の出口に突進した。けれど彼の頭は出口の穴につかえて、そこに厳きびしくコロップの栓をつめる結果に終ってしまった。それ故ゆゑ、コロップを抜くためには、彼は再び全身の力を込めて後うしろに身を退ひかなければならなかったのである。

この騒ぎのため、岩屋のなかではおびたゞしく水が濁にごれ、小蝦えびの狼狽ろうばいといったは並たいていではなかった。けれど小蝦は、彼が岩石であろうと信じていた棍棒こんぼうの一端がいきなりコロップの栓となったり抜けたりした光景に、ひどく失笑してしまった。全く蝦という小動物ほど濁った水のなかでよく笑う生物いきものはいないのである。

山椒魚は再びこゝろみた。それは再び徒勞に終った。何としても彼の頭は穴につかえたのである。

彼の目からは涙がながれた。

「あゝ神様！ あなたはなさけないことをなさいます。たった二年間ほど私がうっかりしていたのに、その罰として、一生涯私をこの害あなぐらに閉じこめてしまうとは横暴であります。私は今にも気が狂いそうです」

諸君は、発狂した山椒魚を見たことはないであろうが、この山椒魚に幾らかその傾向がなかったとは誰だれがいえよう。諸君は、この山椒魚を嘲笑ちようしやうしてはいけない。すでに彼が飽きるほど闇黒あんこくの浴槽よくそうにつかりすぎて、最早もはやがまんがならなideいのを、了解してやらなければならない。いかなる瘋癲ふうてん病者も、自分の幽閉されている部屋から解放してほしいと絶えず願っているではないか。最も

人間嫌いな囚人でさえも、これと同じことを欲しているではないか。

「あゝ神様、何うして私だけがこんなにやくざな身の上でなければならぬのです？」

岩屋の外では、水面に大小二ひきの水すましが遊んでいた。彼等は小なるものが大なるものゝ背中に乗っかり、彼等は唐突な蛙の出現に驚かされて、出鱈目に直線を折りまげた形に逃げまわった。蛙は水底から水面にむかつて勢いよく律をつくって突進したが、その三角形の鼻先を空中に現わすと、水底にむかつて再び突進したのである。

山椒魚はこれ等の活潑な動作と光景とを感動の瞳で眺めていたが、やがて彼は自分を感動させるものから寧ろ目を反むけた方がいゝということに気がついた。彼は目を閉じてみた。悲しかった。彼は彼自身のことを譬えばブリキの切屑であると思つたのである。

誰しも自分自身をあまり愚かな言葉で譬えてみることは好まないであろう。

たゞ不幸にその心をかきむしられる者のみが、自分自身はブリキの切屑だなどと考へてみる。たしかに彼等は深くふところ手をして物思いに耽ったり、手にじんだ汗を屢々チヨツキの胴で拭いたりして、彼等ほど各々好みおのおののまゝの恰好こゝろをしがちなものはないのである。

山椒魚は閉じた目蓋まぶたを開こうとしなかった。何となれば、彼には目蓋を開いたり閉じたりする自由とその可能とが与えられていたゞけであつたからなのだ。その結果、彼の目蓋のなかではいかに合点がてんのゆかないことが生じたではなかつたか！ 目を閉じるといふ單なる形式が巨大な暗くらやみを決定してみせたのである。その暗やみは際限もなく拡がった深淵しんえんであつた。誰しもこの深淵の深さや広さを言ひあてることはできないであらう。

——どうか諸君に再びお願いがある。山椒魚がかかる常識に没頭することを

軽蔑^{けいべつ}したりルンペンだと言わないでいたゞきたい。牢獄^{ろうごく}の見張人^{みはりじん}といえども、
よほど気難^{きむずか}しい時でなくては、終身懲役の囚人^{いたず}が徒らに嘆息をもらしたからと
いって叱^{しか}りつけはしない。

「あゝ寒いほど独^{ひと}りぼっちだ！」

注意深い心の持主であるならば、山椒魚のすゝり泣きの声が岩屋の外にもれ
ているのを聞きのがしはしなかったであろう。

悲嘆にくれているものを、いつまでもその状態に置いとくのは、よしわるし
である。山椒魚はよくない性質を帯^おびて来たらしかった。そして或^ある日のこと、
岩屋の窓からまぎれこんだ一匹^{いっぴき}の蛙^{かえる}を外に出ることができないようにした。
蛙は山椒魚の頭が岩屋の窓にコロップの栓となったので、狼狽^{ろうばい}のあまり岩壁に
よじのぼり、天井にとびついて銭苔^{ぜにこけ}の鱗^{うろこ}にすがりついた。この蛙というのは淀^{よど}